



特定非営利活動法人

# 子どもの村東北

発行：2017年12月8日

発行責任者：飯沼 一字

仙台市青葉区中央 2-7-30 角川ビル 511

News Letter Vol.18

## 理事長・村長対談

7月に二代目村長に就任いただいた石田公一村長に、これまでのご経験や今後の抱負をお聞きしました。



**理事長 飯沼 一字**  
(いいぬま かずいえ)

【略歴】  
東北大学 名誉教授  
石巻赤十字病院 名誉院長  
医師・医学博士



**村長 石田 公一**  
(いしだ こういち)

【略歴】  
岐阜県中央児童相談所 所長  
岐阜県白鳩学園 園長  
里親支援専門指導員

飯沼 村長就任から4か月が経過しましたが、仙台での暮らし、茂庭台での暮らしはいかがですか？

石田 茂庭台での暮らしには、だいぶ慣れてきました。最近ノルディックウォーキングも始めましたので、ご近所を楽しく歩いています。

飯沼 石田村長は、これまで岐阜県で長きにわたり子どもに関わるお仕事を経験されてきましたが、これまでの経験などお聞かせください。

石田 私が一番長く勤めた児童相談所では、社会的養護の子どもに限らず様々な相談がありました。最後の10年間は虐待対応が中心になりましたが、虐待防止のためには子どもを保護するだけでなく、地域や関係機関と連携をしての「子育て支援」こそが大事だと感じてきました。次に就いた児童養護施設では、社会的養護の子どもに取り組みました。子どもたちを施設の中でだけ対応しようとすると、対人関係が狭くなって施設が孤立してしまうため、地域も学校も様々な関係機関も共に助け合いながら子育てをすることが社会的養護だと考えるようになりました。また、里親相談員になってからは、里親支援員のグループを作り、PR活動や学習会を行いながら里親の支援を行ってきました。そのなかで、里親を支援すると不調が少なくなるのではということがわかってきました。里親支援員の活動を続ける中で、里親支援の量と質が大事だということが分かってきたため、里親支援員十数人でチームを作り不調をなくす為の活動を続けてきました。そしてその4年半の間に関わった里親には不調がほぼ見られなかったという経験をしてきました。

飯沼 一般の実家庭にも親子関係の悩みや問題は起こりますが、特に背景に様々な事情を抱えた子どもたちを育てる里親には、子どもを育てる中での困難や不安が多くあり、周囲からの確かな支えが必要ということ、社会のより多くの方に社会的養護の子ども、里親制度で里親の下で暮らす子どもについて、その存在を知って理解して

もらうことが大事です。そういった意味でも、石田さんの今までのご経験はたいへん貴重なものと思います。

石田 この10年以上前までは、児童相談所が子どもを委託した後は里親へ子育てをすべてお任せにして、相談所側からは口出しをしない、逆に支援をしないという認識が一般的だったと思います。しかし、虐待を受けてきた子どもが増えその子どもたちの家庭養育の不十分さに注目が集まるようになってきて、家庭的な環境で育つことが望ましいと多く言われるようになりました。そうすると、その子どもたちを委託した里親への支援が必要になります。しかし、その対応の仕方が行政でもなかなかわからないということがありました。私のいた岐阜県の場合には、里親相談員を一気に増やしましたので、支援員十数人がグループを組んで、里親支援を大切に考えて地域や全般的な活動を行ってきました。

飯沼 里親支援に関して、地域の違い、岐阜の良さ、仙台の良さなど感じていますか？

石田 宮城県の里親支援センター「けやき」の開設や、仙台市里親会の研修会の6回の連続講座が子どもの村東北センターハウス杜のホールで行われるなど、行政と民間団体が連携した里親支援への取り組みは、岐阜では行われていなかったことで、とても有意義で素晴らしい事だと思います。

飯沼 最後に、子どもの村東北二代目の村長としての抱負を聞かせてください。

石田 村の建設にご支援いただいた多くの寄付者の方々、今も支えてくださっている支援者の方々に感謝しながら、常に原点に立ち返ることを忘れず、にぎやかな子どもの声ができる村にするよう活動に取り組んでいます。児相や学校との関係機関、また、NPOなど地域との関係を大事にしながら、村の育親さんたちが活動しやすいように道を拓いていく役割があると思いますので、それを心に留めて務めていきたいと思っています。